

祈りあう教会を目指して

(「テサロニケ五・二三〜二八」)

科学万能の七〇年代に少年期を過ごした者にとって「祈り」は実に都合の悪いものだった。「祈ったって治るわけないし」「祈るなんて非科学的だろ」と言った言葉をどれほど聞いたことか。大学生になっても「いやし」や「奇跡」を強調するペンテコステ派にいたことが災い(?!)して同信の方々からも「祈ってばかりいたって、」と揶揄されたことも残念だがあった。しかしどうだろう。時代は変わった。カリフォルニア大学の実験によれば、コンピューターで無作為に選んだ2つの心臓病患者のグループに、一つは祈る人々を与え、もう一つはそういう人をおかずにいたところ、祈られたグループの治療効果は肺気腫になった人は $\frac{1}{3}$ 、抗生剤を必要とした患者はわずか $\frac{1}{9}$ であったという。祈りは効く。確かに効くのだ。

一、聖化を願う祈り

二三節の祈りは三・一三の祈りに酷似しているが、それはこの祈りがパウロのテサロニケ教会に対する主要な関心事であったことをよく示している。もう何度も語ったがパウロにとつて兄弟姉妹たちの成長は彼自身の人生の意味と直結していた。だからこそパウロは道が閉ざされてもテサロニケ再訪を企画し、それが駄目なら手紙を書いて彼らの信仰成長を促したのであるが、彼はそこに「祈り」を加えることを忘れなかった。というのもパウロは信徒の「きよめ(＝聖化)」は自らの努力によつて完成するものではないことをよく知っていたからである。では彼はテサロニケ教会において創められた救いの業を推進する方は誰だと言っているだろう。もちろん神である。しかもここでは真実であるという形容までついているのだ(二四節)。ときに「真実である」ということばには「信頼できる」という意味がある。そして信頼できる背景にはその信頼の対象が嘘をつかないことが挙げられる。私たちの霊的成長は私たちを真に愛し、いつも励まし、嘘をつくことのないお方である神ご自身によつて保障されているのだ。だからこそ私たちは期待と共にお互いの成長を成長への力を与える主に祈るのである。祈りは信徒の成長のためには不可欠なのだ。

二、祈り合う関係づくり

このようにパウロは最後の最後まで信徒の成長のために祈り続けたのだが、それは決して一方通行のものではなかった。むしろ二五節にあるように「私たちのためにも祈ってください」と信徒たちに自らのことについて祈るように求めている。つまりパウロは自らを信徒よりも一段高い場所に置き、さながら「ワタシ作る人、ばく食べる人」のごとくに二分化を行うのではなく、それぞれの召しの違いは意識しつつ、且つ地理的には離れてはいても共に祈り合う「交わり」を求めていたのだ。

ここで問題になるのは「わたしたちのために」ということばが具体的に何を示しているかである。三章一節にある祈りから考えるとパウロたちのテサロニケ再訪が叶うようにということも考えられるが、異本のいう「私たちのためにも」また(同じように)「祈ってください」という訳から考えると、実にパウロが自らの救いの成長と完成という祈祷課題をテサロニケ教会に対して挙げていたということにも解してよい。そしてそれはある意味実にパウロ的だとも言える。というのもパウロは一方においては自らを召した神の真実を確信しているものの、他方においては自らが失格者になることがないようにと常に自戒していたからである(「コリント九・二七

参照)。このようにパウロは常に自らを祈りのネットワークの中に置き、人々の祈りに支えられて奉仕のわざを続けていったのである。

* * *

ベテルに来てから八回目のクリスマスがやってくる。八年前の四月に父を天に送り、六月にベテル行きの内示を受け、引越しをしながら同時進行で最初の礼拝の週報を作成した記憶は今も鮮明である。この八年間ベテルにおいて重点的に取り組んできたことは「祈り」と「みことば」である。牧会の基本を聖書にあれば岩の上に土台を立てることになり、揺るがない教会になる。また祈りを絶やさず、神につながつておれば教会の中には聖霊の息吹が満ち、私を含めた全教会員が成長し、神の栄光を表すことができる。この二つは教会の基本であり、全信徒(牧師を含む)の基本である。友よ、クリスチャンの生活は祈りにはじまり祈りに終わるもの。牧師はパウロがしたように信徒の霊的成長のため絶えず祈る事が、愛兄弟もまた立てられた牧師の救いの完成のために祈ることが求められている。ベテルキリスト教会は神の家、そして諸国民の祈りの家だ。御霊に燃え、祈りの火をともし続けたい。(了)